

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 42 回 第 10.2.3 節～第 10.3.3 節

2019 年 9 月 15 日

小 田 勝

お陰様で本書も、重刷第 4 刷を発行することとなった（2019 年 8 月 25 日刊）。第 4 刷に当たり、この補遺稿上で指摘した字句の訂正を反映させた。次の通りである。

35 頁 10 行目「(古今著聞集)」→「(古今著聞集 72)」〔補遺稿第 1 回で指摘〕 / 58 頁用例(16)「御心よりありし」→「御心より起こりてありし」〔補遺稿第 4 回で指摘〕 / 216 頁下から 14 行目「確かにありましようか」→「確かにあるだろうか」〔補遺稿第 28 回で指摘〕

また、補遺稿第 14 回で指摘した、134 頁用例(8)(9)の出典表示「源氏」を「源」にするとともに、127 頁用例(9)(10)、159 頁用例(2)、256 頁用例(10)でも出典表示が「源氏」となっていたので、「源」に改めた。さらに、本補遺稿でも見逃していたが、46 頁 8 行目の「見す(四段)」を「見す(下二段)」に訂正するとともに、43 頁 3～4 行目の「仕ふ・使ふ」を「仕ふ(使ふ)」とした。その他の字句の訂正については、本補遺稿の進行に合わせてお知らせする。

さて、290 頁「10.2.3 結果修飾」からである。まず、用例を追加する。

- ・六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、すみ給ひけり。(伊勢 81)
- ・御簾のそばいとあらはに引き上げられたるを、とみに引き直す人もなし。(源・若菜上)
- ・またの年の秋、[姫君ハ]また男君[ヲ] うつくしう生み給へれば(落窪)

次例は「漕いだ結果、手が懈くなるほど(速く)」の意であって、「気力なく」の意ではない。

- ・音戸おんどの瀬戸せとといふは、滝のごとくに潮速く狭き所なり。船ども押し落とされじと、手も懈く漕ぐめり。(鹿苑院殿巖島詣記)

古典語では広くみる表現だが、現代語では「\*手もだるく荷物を下ろす」「\*足もくたくたに歩く」などとは言わない。

- ・思ふとも恋ふとも逢はんものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐(古今 507)

- ・ 手もたゆく 鳴らす扇の置き所忘るばかりに秋風ぞ吹く (新古今 309)
- ・ 君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺りてば良けむ (万 1281)
- ・ みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで海人の 足たゆく 来る (古今 623)

次例は、「そのような結果になるように」のような意であろう。

- ・ 和泉の国までと 平らかに 願立つ。(土佐)
- ・ [匂宮ハ] いとうれしと思して、もろともに (=一緒ニ行コウト) [薫ヲ] 誘ひ給へば  
(源・総角)

291 頁「10.2.4 時間を表す連用修飾」。「久しく+動詞」は、「長い時間かけて…する」の意である。

- ・ いますこし幼げに、久しく 書き出で給へり。(源・橋姫)
- ・ [浮舟ハ] いと苦しげにややみて、久しく [車カラ] 下りてみざり入る。(源・宿木)
- ◆に「暁深く」という表現をあげたが、「暁遠く (=夜深く)」という言いかたもあった。
- ・ 難波江の蘆の浮き寝の長き夜に 暁遠く 鳴く千鳥かな (続千載 629)

同頁「10.2.5 場所を表す連用修飾」。類例を追加する。

- ・ 音羽山木 高く 鳴きて郭公きみが別れを惜しむべらなり (古今 384)
  - ・ 上達部、殿上人、皇子たち、あまた候ひ給ひければ、[遊女ハ] 下に遠く 候ふ。(大和 145)
- 次例は、「遠くへ」の意である。

- ・ このついでに 輔昭、遠々しく 去ぬべきことなど言ひて (公任集・詞書) <新大系本「遠く」>

292 頁「10.2.6 程度を表す連用修飾」でも、類例をあげておく。

- ・ [末摘花ノ顔ノ] 色は雪 恥づかしく 白うて、さ青に、額つきこようなうはれたるに (源・末摘花)
- ・ [追従者ガ法師ニ女ヲ紹介シタトコロ、法師ハ] 「よかなり」と言ひければ、心憂く 装束 か せて (=イヤニナルホド仰山ニ着飾ラセテ)、出で来にけり。(古本説話集 62)

第 10.2.7 節の後に、「10.2.7 連用修飾語の非表示」という節を新設し、289～290 頁、第 10.2.2 節の用例(15)～(21)をこちらに移動する。次例は、状態修飾語の非表示例である。

- ・ 秋風になびく草葉の露よりも φ (=ハカナク) 消えにし人を何にたとへん (拾遺 1286)

293 頁「10.2.9 遅く…・待ち遠に…」。用例(1)～(6)の類例を追加する。

- ・ おぼつかなきもの。…いま出で来たる者の (=新参者デ)、心も知らぬに、やんごとなき物持たせて人のもとに遣りたるに、遅く 帰る。(枕 67)

- ・この児ちごの遊あそびに出いでて往いぬるが、遅おそく帰かえりければ、あやしと思おもひて出いでて見みれば、足形あしかた、後かたろの方かたから、踏ふみて行いきたるにそひて、大おほきな犬いぬの足形あしかたありて、それよりこの児ちごの足形あしかた見みえず。山やまざまに行いきたるを見て、これは虎この食くひて行いきけるなめりと思おもふに、せん方かたなく悲かなしくて（宇治 12-20）
- ・里さとに出いでたる人ひとの遅おそく参まゐりければ、梅うめの花はなを折おりてつかはすとて色香いろかほをも知る人ひとなしと思おもふらん花はなの心こころを来きてもとへかし（続拾遺 45）

中世になると、現代語と同じ「遅く」の用例がみえはじめる。次例は、「どうしてなかなかお帰りにならなかったの」の意であるにせよ、父は帰って来て目の前にいる。

- ・「父のおはします嬉うれしさよ。などや遅おそく御帰ごかえりありける。…」など言いひて、よにいとけなき撫なで子この姿すがたにて、[父ちち]狩衣かまどの袂たもとにすがりけるを（西行物語）

「10.3.1 形容動词语幹と名詞」の 296 頁用例 (8) の類例、

- ・遙はるかより人ひとの音ね多くして（宇治 1-3）

用例 (10) の類例を追加する。

- ・御子ごこは、立つもはした、居ゐるもはしたにて、ゐ給たまへり。（竹取）

297 頁の◆にあげた「文選読み」の例を、念のため追加しておく。

- ・塩屋しほやには薄うすき煙けむり靡び然ぜんとなびきて（海道記）
- ・十八じふはち猛まう鬼き（＝地獄じごくノ獄卒ごくそ）の怨うらみ忿ふんといかれ声こゑ、天雷てんらいの落おちかかると如ごとし。[獄卒ごくそノ]六十四むそじゅう眼がんの睚がい眦さいとにらめる光ひかり、熱鉄ねつてつのほどはしるに似にたり。（海道記）
- ・北南きたみなみは渺たか々たかとはるかにして（東関紀行）

同頁「10.3.2 形容動詞の並置」の下から 2 行目、「形容動詞はまた、形容詞とも並置される」であるが、次例のように、状態的な意義をもつ動詞とも並置される。

- ・[朱雀院ハ]いとなまめき清きよらにて（源・絵合）

298 頁「10.3.3 句による形容動词语幹」では、次のような例もある（§1.8.3）。

- ・内うちにも御覧ごらんぜさせよとおぼし顔かほに、歌三つ書かき付けられたりける中に（後拾遺 536 詞書）
- ・げに行く末すゑも思おもひおとし聞きこえさせ給たまひがたげなる御ごけしきどもなり。（狭衣）

形容詞の「荒々し・長々し」のように、形容動詞でも語幹が繰り返されることがある。

- ・鑄物師くわぶつしが妻つまをみそかみそかに入り臥ふし入り臥ふしせしほどに（宇治 1-5）

[出典追加] 鹿苑院殿巖島詣記①今川了俊（1326-1414 頃）②1389 年の記事③中世日記 紀行文学全評釈集成 6